

日々の業務から 次に思うこと



札幌市医師会
緑愛クリニック

安藤 慎吾

今回、年男に当たるとのことで、本欄へ寄稿のご依頼を受け、恐縮です。今年48歳になると気付かされ、多くを成し遂げていないことを思うと、歳を取るの早いものだと感じます。早いと言え、現在の勤務先に異動になって、3年が経過しました。外来や訪問診療を中心とする業務を着実にやることを心掛けながらの毎日でした。産業医業務では、自分の勉強のためと、労働衛生コンサルタント資格も取得しました。幅広い領域に関わることに、家庭医はいろいろつまみ食いがいいんだよ、と以前の上司だったある先生から励ましのように言っていたこともあります。

クリニックは小規模の職場のため、一人で動き回ること、何でも自分でできるような錯覚に陥りそうでしたが、一人ですべてを把握したり、業務を実施することは無理であり、職場のスタッフとの協力があってこそだと改めて実感するところです。

仕事というのは一見毎日同じことの繰り返しのような気持ちになることもありますが、やはりそうではなく、その時々的確な診断や対応、患者さんに応じた丁寧な説明が大切なのだと考えています。

また、クリニックという小さな組織ですが、運営にも、何らかの発展を展望したいものです。つい先日見たテレビ番組で、ある経営者がビジョンを共有できる人を採用したいといった話をしていました。同時に職場内のフラットな関係、つまり経営者や上司もそうでない職員も対等に議論ができるような環境づくりを目指しているそうです。フラットというのは、折しも先日10月に札幌市医師会の在宅医療研修会の講演にいらした福井県の紅谷医師が、自らの組織の紹介で用いた言葉でした。クリニックの業務で特に在宅、訪問診療に多く関わるようになり、多職種連携の必要性を強く意識するものの、実践には困難を感じる経験は少なからずありました。ここにもフラットな関係・組織など、何か改善のヒントがつかめないかとも思います。

さて、改めて新年を迎え、これまで同様、あまり計画性のないまま、診療等を通じていろいろな領域に興味を持ち、諸課題をこなしながら、何とかやっていくことになるのかと、どちらかという心配が尽きません。診療所勤務の一臨床医として、標準的なレベルを意識しつつ診療を続けられるよう、時に医師会、各科の諸先生方のご指導を頂ければ幸いです。

還暦の雑感



札幌市医師会
いとうひろし内科・糖尿病内科クリニック

伊藤 博史

明けましておめでとうございます。本年は酉年で、私は還暦ということでご指名をいただきましたので、寄稿させていただきました。

今年で60歳になるという実感がうまくつかめておりませんが、これをよい機会として、私の近況を書かせていただきます。

私は、旭川医科大学を昭和58年に卒業し、その後、当時の同第二内科に入局し、その年の秋から、今というところの初期研修として、市立釧路総合病院の内科にて二年半の間お世話になりました。大変多くの先生方、スタッフの方にお世話になり、なんとか医者らしくさせていただきました。その後、医局に戻り、糖尿病グループに加わらせていただきましたが、その当時は、とりあえず夕方5時になったら医局に集合し、ビールから始まる宴会がルーチンワークで、自分たち新人の役割は、先輩先生からのお説教をだまって聞くこと、でした。新人なりにいろいろ不満もありましたが、「役割」が明らかでしたので、案外過ぎやすかったことを記憶しております。一方で、その頃は、糖尿病グループとして研究対象としていた自然発症糖尿病チャイニーズハムスターと格闘する日々が続きました。自分の研究レベルは低いものですが、諸先輩のご指導の下でその研究成果を論文にでき、博士号取得に結びつけることができました。どんなちょっとしたことでも、自分なりに「こうかもしれない？」と考えて、それにまつわる事柄を調べ、実験や調査を組み立ててみるのが、楽しいことである、と自覚できるようになった初めての経験だったかもしれません。

その後、留学、大学医局での生活、関連病院での診療を経過し、大変遅ればせながら、縁があって、一昨年秋に現在の診療所を継承・開設させていただきました。開業後は、この年齢になって、初めてのことばかりを経験し続けておりますが、これまでの医者、医療者ばかりの生活範囲から、社会生活へと範囲が広がってきていることを感じており、一方では大いに戸惑いながら、これまでの医者オンリーの生活を見つめ直してもいる毎日です。